

問一 A 前の段落で、「ヒヤリ」や「ハット」のようなレベルの出来事や軽いケガを伴う事故が一定数起これば重大な事故に至り得ることを数値で示し、後に続く段落でその内容をまとめる形で説明している。説明の意味を表す「つまり」が適切。

B 前文で、失敗が表にでることが書かれ、後の文ではひとが「なんか、まづくない？」と感ずることが書かれている。順接の意味を表す「すると」が適切。

C 前の段落で、失敗の萌芽が破裂して甚大なダメージを与えることが書かれていて、後の段落では、そのもととなる失敗の核が無数に生まれることが書かれている。添加の意味を表す「しかも」が適切。

問二 「重傷」は「上の漢字が下の漢字を修飾する」成り立ちの熟語である。イの「解放」は「似た意味の漢字を重ねて意味を強める」成り立ちで、アの「注意」は「下の漢字が上の漢字の目的語になる」成り立ち、ウの「早春」が「重傷」と同じ成り立ちで、「上の漢字が下の漢字を修飾する」成り立ち、エの「非常」は「上の漢字が下の漢字の意味を打消す」成り立ちの熟語である。

問三 「未然」は、「まだ起こっていない段階であらかじめ」という意味である。重大な事故が起こる前に防ぐためには、「ヒヤリ」や「ハット」を重要だと考えることが大切である。

問四 ハイニンリツヒの法則では、「重大な労働事故」を防ぐためには、「ケガをしない三〇〇回の事故」にしっかりと対処する必要があることが述べられている。

問五 本文の後半（「取り返しがつかないほどの失敗が起きたとしたら…実は、その背後に…潜在的に三〇〇の些細な失敗がある」）に合致している。「一つの重大な結果の背景には、多数の軽微な問題が存在する」というハイニンリツヒの法則の本質を正しく表現している。

問六 Y 空欄Y以降で、失敗の萌芽が成長すると「甚大なダメージを周囲に与えてしまう」と述べられている。核の段階ではまだその「ダメージ」は生じ

ない、という文脈になる。

Z 空欄Z以降の文章の内容をふまえて考える。核が時間がたつてエネルギー（活動のもととなる力）を蓄えると萌芽する。

問七 ——線部④のすぐ後の段落の一文めの内容をまとめる。

問八 「あまり」は、「程度が少ない」という意味の副詞で、「あまりくはない」という形で使われる。

問九 文の中の「何が・何は」や「だれが・だれは」に当たる言葉を主語という。

問十 「取り返しがつかないほどの失敗」は、「後悔してもしきれないような失敗」とほぼ同じ意味を表す。

問十一 A ハイニンリツヒが発見したのは、「労働事故」における法則である。

イ ハイニンリツヒは、「ヒヤリとした」り、「ハットとした」程度の事故に対応することの重要性を述べている。

ウ 「失敗の核」が「萌芽」とすると、失敗がなんらかの現象となって表に出て、ひとははじめて「まずいことになっている」と感じ始める。

問一 A 「なんだか」は、「はつきりした理由は分からないが、そう感じる状態」を表す副詞である。

B 「ほとんど」は、「ごくわずかしかなこと」を表す副詞である。

C 「それほどくはない」は、「そんなにくではない」という意味を表す副詞である。

D 「もちろん」は「言うまでもなく、そうである」という意味を表す副詞である。

問二 a ——線部①の後で、ハネリカは暦と「同じクラス」であることが説明されている。

b 妹の由梨は足がたぶん遅いと思えるくらい「おっとりしている」と説明されている。

問三 立見さんや川澄さんは、由梨が自分たちのことをバカにしていると思っている。

問四 ハネリカに無視され、自分が疑われていると感じた暦は、「自分がとつたの

ではないと証明できないまま、教室でひとりぼっちで過ごしている自分」のすがたを想像するくらいにとまどっている。

問五 暦をかばうことばである「アホか。ミケはそんなことしないぞ」という床井くんの一言で、暦の心は軽くなったと考えられる。

問六 ——線部④のすぐ後の内容をまとめる。

問七 暦のおかあさんは双子ふたごであり、直前で、「暦となごみちゃんのおかあさんたちも、子どものころの写真はそっくりだった」と説明されている。

問八 立見さんと川澄さんが妹の悪口を言ったことや、ハネリカが本心を隠かくして相手に合わせていたことが明らかになることで、三人の関係がこじれることを暦は心配した。

問九 本文の前半部分で『由梨っぺ』というのは、妹のほうの羽根さんのあだ名」と説明されている。

問十 ア 立見さんと川澄さんは、ハネリカの機嫌をとるためにキーホルダーをほめたが、それをほしがっていたとは書かれていない。

イ ハネリカは最初のうち、暦のことを無視して、直接話そうとはしなかった。

エ 暦の疑いが晴れたのは、由梨さんがキーホルダーを持ってきたからで、床井くんが疑いを晴らしたのではない。

三

(1) 「猿（さる）も木から落ちる」…どんなに得意なことでも、時には失敗することがあるということ。

(2) 「立つ鳥（とり）あとをにごさず」…その場を去るときは、周囲に迷惑めいわくや不快を残さず身を引くべきだということ。

(3) 「猫（ねこ）に小判」…価値のわからない相手に貴重きちょうなものを与えてもむだであること。

(4) 「馬（うま）が合う」…相手と性格などの相性が良く、気持ちよく付き合えること。

(5) 「雉（きじ）も鳴かずばうたれまい」…余計なことを言わなければ、自分か

らわざわいをまねくことはないということ。

四

(1) ① 「覚えられる」は可能の意味を表す助動詞。エの「起きられる」が同じ。

② 「かけられる」は受身の意味を表す助動詞。ウの「売られる」が同じ。

③ 「来られる」は尊敬の意味を表す助動詞。イの「語られる」が同じ。

(2) ① 「本」は、「数量や位置のような、形で表せないものを絵のような記号にして示した」指事文字である。

② 「男」は、「象形文字や指事文字を、もとの意味をいかして組み合わせた」会意文字である。

③⑤ 「味」「銅」は、「二つの文字を組み合わせたもので、一方が読み（音）、他方が意味を表す」形声文字である。

④ 「竹」は、「物の形をかたどって作った」象形文字である。

五

(1) 略歴…それまでに経て来た学業・仕事・地位などの事がらを大まかに示したもの。

(2) 屋内…屋根や壁で囲まれた建物の内部空間。

(3) 快晴…ほとんど雲がないすっきり晴れた天気。

(4) 武器…目的を達成するための有力な手段。

(5) 険しい…山や坂の傾斜けいしゃが急であること。

(6) 緑化…ある場所に草や木を植えて国土の緑を増やすこと。

(7) 率いる…集団や組織の先頭に立つてまとめること。

(8) 障害物競走…走路上にさまざまな障害物を設置し、それを飛びこえたり、くぐったりしながら、ゴールまでの速さを競う競走。

(9) 往復切符…同じ区間の「行き」と「帰り」の乗車を一組としてまとめて購入する切符。

(10) 配達…くばりとどけること。またその人。